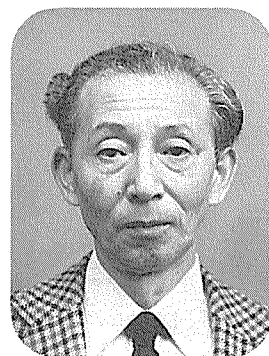


1993年FIP京都シンポジウムの開催について



君島博次*

FIPとは国際プレストレストコンクリート連合のフランス語が語源で、4年ごとに大会が開かれ、1986年にはニューデリーで、'90年にはハンブルグで、来年はワシントンで行われる。その中間年には各地でシンポジウムが開かれ、一昨年の北京、去年のブダペストに次いで本年の京都開催となったものである。

本件は1985年、故猪股PC技術協会会長の時に提案され、東京・横浜・京都の3案を比較検討のうえ京都に決定し、'87年より準備開始した。その後間もなく組織委員会・実行委員会を編成して準備を具体化した。実行委員長六車教授を筆頭に、京都大学の諸先生、PC技術協会、PC建設業協会の正会員・賛助会員の皆様の絶大な御支援のもとに'93年10月17日～20日まで京都国際会館にて今回のシンポジウムが挙行されたものである。

登録された参加者は同伴者を除き630人余りで、外国人は国籍39か国で約140人、台湾からの参加者が最も多く25人であった。

提出論文は総合標題“PCの最新技術とその応用”のもとに223篇の論文が提出されて、わずかな欠席者もあったが、説明と質疑応答が行われた。

他方、広さ3000m²あるイベントホールでは、総合建設業・PC専門およびその他関連の合計52社から出展された機材とそれらの写真・図面・模型などが展示された。

●シンポジウムと催し物の経過

大会開催の前日16日には宝ヶ池プリンスホテルで、FIP会長主催で池田PC技術協会長出席の理事会が開催され、また同夫人達のために西陣織会館の訪問ツアーが催された。同日夕食は三野PC建設業協会長の御招待による理事会メンバーと同夫人達に対する純日本食の接待が老舗のやまとで行われ、初めて経験された和室における日本食に対して、感嘆と戸惑いの声があがっていた。

翌17日には前記メンバーに対し、南禅寺・琵琶湖疎水と同記念館・醍醐寺三法院の見学ツアーが催された。

東京工部大学卒業間もない田辺朔郎技師による疎水の重大工事完成100周年を記念して建てられた記念館内には、当時の技術水準で経験された困難を示す多くの資料が展示されていた。

同日夕刻までに登録を終えて6時から全員の歓迎レセプションが会館のスワンの間で開かれた。司会

* Hirotsugu KIMISHIMA : FIP 国内組織委員会委員長, 本協会顧問

◇巻頭言◇

六車熙実行委員長，開会の辞池田 PC 技術協会長，歓迎の辞 Moksnes FIP 会長，乾杯の音頭は三野 PC 建設業協会長より賜われた。多勢の参加者は和気藹々のうちに時間が経つのも忘れて過ごし，立食の懇談会を盛大に終了した。

18 日午前には大会議場で開会式が行われた。壇上には FIP 会長以下，元会長・副会長・事務局長が，日本側には君島組織委員長，藤井建設省技監，池田協会長が並び，六車委員長の司会のもとに，まず組織委員長の開会宣言，藤井技監と Moksnes FIP 会長の祝辞があった。次いで FIP 会長より同会に対する功績を表彰して FIP メダルが池田尚治 PC 技術協会長と六車熙実行委員長に授与されて前半を終わり，その後，ノルウェーの J. Moksnes 氏が最近の北海プロジェクトを説明する“海洋構造物”について，また山下宣博 PC 技術協会理事が“日本の PC 橋梁”を，六車熙京大教授が“日本の PC 建築物”についての講演を行い総会を完了した。

午後からは多数の室に分かれて，総合標題の“プレストレストコンクリートの最新技術とその応用”の中の 8 項目に分類されるテーマに従い，各座長・副座長の司会のもとに所定の時間の中で，著者説明と質疑応答を経ていずれも順調に予定どおりにセッション運営が行われた。

同時に予定に従いイベントホールでは各種テーマに基づいたポスターセッションも実施され，発表聴講の合間に訪れる観客で大変な賑わいを見せていた。

レディスプログラムでは 18 日の午後は半日の市内観光ツアーで，平安神宮・三十三間堂・清水寺の参観が，19 日（火）のプログラムでは奈良の一日ツアーが実施され，東大寺の大仏と春日神社観光が催され，共に初めての外国婦人にとっては珍しい異文化を観賞されたことと思われる。

同日夜はプリンスホテルの大広間で全員参加の晩餐会が盛大に開かれた。池田協会長の開会の辞，FIP 会長 Moksnes 氏の歓迎の辞，FIP 副会長の D. Lee 氏（英）の祝辞があった。次いで今回のシンポジウム開催の労をねぎらって，FIP 会長より，君島組織委員長，池田 PC 技術協会長，京都大学の六車実行委員長，渡辺史夫先生，西山峰広先生に対して記念品の贈呈があった。

20 日（水）は予定どおりテクニカルセッションとポスターセッションが進行して終了し，午後 4 時半から閉会式が六車実行委員長司会のもとに行われた。池田 PC 技術協会長の閉会の辞，Moksnes FIP 会長の謝辞があった。引き続いて，1994 年のワシントンにおける FIP 大会の招致演説がスライドを併用して米国の C.W. Wilson 氏よりなされ，次に 1995 年のブリスベーンにおけるシンポジウムの招致演説がオーストラリアの J.G. Forbes 氏より行われた。

これをもって今回の京都シンポジウムは万事滞りなく予定どおりに終了し，一同別離を惜しんで散会した。

●シンポジウムの所感

近年の日本の国際的地位の向上につれて数多くの分野でしばしば国際会議が開かれている。土建部門でも稀ではなくなってきたが，さほど多いわけでもないのので，国際会議ぐらひは開きたいという気持ちと，その準備・運営が大変だという思いが交錯して，率直に申して当初はかなり気重に感じられた。しかし京都大学の諸先生を初めとする実行委員の綿密な実施計画と，PC 技術協会・PC 建設業協会の役員・会員諸氏の物心両面にわたる多大の御協力によって，このシンポジウムを大成功裡に完了することができたわけである。実際何人かの外国参加者からも，ゆき届いた心配りと完璧に近い運営に賞嘆の辞が告げられ，将来のシンポジウム開催がやりにくくなると冗談さえ言われた。日本が自動車・カメラ・

OA 機器などで世界市場の圧倒的なシェアを占めているのも、実は今回のシンポジウムで示されたように、心細やかな心配りであってのことではなかろうかと思ってみた。異常気象の本年のことだけに天候には気をもんだが、ポストシンポジウムツアーも含めて、台風・雨天にもならず幸運であった。

外国人参加者から、近年の日本人は昔と違って英語が皆上手になったとの所評を得た。たしかに若い人はチャンスが多いせいか英語を話せる人の数は増えたようである。しかし他方において、論文発表は無難に済んだのに、質疑応答の段階になるとほとんど駄目になる人が多かった。英語圏外の人々の発音はわかりづらく、かといって英語圏の人は早口で喋るし、平素馴れない人には無理からぬことではある。結局日本人の英語は受験用英語で実際会話用ではなく、したがって発音はカナ表記に近く、アクセントやイントネーションには関心を持たない日本式英語になっているのが通じない理由と思われる。しかし池田PC技術協会長による挨拶では、公式用語はきれいな英語でなくても Broken English でよいとのことであったから、ひるむことはない。

遠い東洋の国の異文化を味わい、違う習慣に触れる目的をもって来日された外国人も多いと思われるが、社寺料亭の玄関で靴を脱いで上がる習慣に戸惑いを感じていたようであった。また彼らは、畳の上のお膳に向かって2時間余り座って食事することはできなかった。お膳の横に脚を投げ出す人、途中で立ち上がって膝を伸ばし徘徊する人、床の間や書院の一段高い所に腰かける人など、おもしろい光景であった。日本料理は食べる前に食器・盛付け・中味を視覚的にも賞味してから箸をつけるものという点は理解していたが、ふ・ゆば・うに・なまこなどに至っては英訳も困難だし、食欲も起こらなかったようである。なかには海産物はほとんど喰べたことがないという人もいた。

会場の京都国際会館は、建物の設計がコンペで選ばれただけのことはあって、合掌造りの様式を採り入れたユニークな外観と入念な内装・設備を備えたすばらしい建築物である。しかし内部不案内な外来者から見ると、内部は上下左右が複雑な立体配置の総数100室にも達する部屋と通路より成り、せっかく捜し当てた往路を帰途にスムーズにたどることはまず困難を覚えるほどであった。

エレベーターと、案内・標示板の不足があったけれど、建築美を求める設計者にとって優秀な作品でも、地方から初めて来て使用する利用者にとっては必ずしもそうでないことを痛感した。

市内観光の際の感想を一言つけ加えよう。醍醐寺参観の折に、手入れの行き届いた三宝院の美しい庭園を觀賞していた外国人が庭の写真を撮ろうとしたら、監視員に阻止され、本人や周辺の人達まで理解に苦しんでいた。博物館内の絵画がフラッシュの紫外線を嫌うのはわかるけれど、庭園を撮影して何がいけないかという疑問であった。そういえば、京都は以前から社寺の参観禁止措置などを採られたことがあって、商業主義が観光客の利便より先行していたことを思い出し、将来の問題点のように思われた。

ポストシンポジウムツアーは参加しなかったので触れないが、参加者は満足されたと聞いている。

本文終りに臨んで改めて申し添えたいことは、今回のPC技術界にとっては初めての国際シンポジウム開催という大事業を、これほど完璧に無事終了できたことは、誠に御同慶の至りであると同時に、これもFIP国内組織委員会・同実行委員会・PC技術協会・PC建設業協会会員と両協会事務局の皆様の絶大な御協力あってのものであったことを繰り返して申し述べ、御礼に代えさせていただくことにする。